

「私と読書」(No17) 「廃仏棄釈」と「鹿児島観光・文化検定」

昨年7月、日本臨床細胞学会、九州連合会創立50周年記念に学会功労賞を授賞しました。その後、様々な方から、ねぎらいとお褒めの連絡を受け、大変励まされました。この紙面をお借りして感謝申し上げます。印象に残ったものを幾つか紹介します。<小学校恩師の娘さんから>: お元気かしら? と思っておりましたが、この様な嬉しいお便りを頂きまして、とても幸せな気持ちになりました。長年に渡るご努力の跡を改めて見せて頂き、只々感嘆とため息しきりでした。どうぞこの先もお身体をご自愛され、日本の、世界の医学の為にご活躍下さい。戴きました資料は、亡くなった父にも良く伝わるように、大切な箇所に線を引かせて頂き、父と母の写真の前に供えさせて頂いております。<鹿大同級生(病理科)>: 先生の医師としての信念と研究者としての先見の明と重厚な業績を再認識して感動しています。先生自身のなすべきことをなし、与えられた使命を果たされた先生の尊厳に触れたような思いです。同級生として誇りに思い、私の心がパッと明るくなりました。<高校と大学同級生(小児科)>: 先生の地道で卓越した考えは、先生の天性ですね。学生時代の社医研活動の頃もそうでした。これからも増々精力的にお励み下さい。写真の中の看護師さんの笑顔、懐かしく南地区診療所時代が蘇ってきました。有難う御座いました。<臨床細胞学鹿児島支部の草創期の元医師会病院検査技師さん>: 細胞診の発展、普及に貢献されたことは無論ですが、当時まだ私より先輩の病理医は、細胞診の評価が低く、指導医は全国的にも少ない中、逸早く資格を取られ、病理医への意識改革にも多大の影響を与えられたと思います。久しぶりに昭和48年頃のことを思い出しました。私の場合も Dr. Koss などの洋書の慣れない横文字に奮闘したことや、和気あいあいの少人数での勉強会で遠くは志布志、枕崎、出水などから来られる人のために実のある勉強会しなくてはとの思いでした。草創期にご一緒に活動出来たことを嬉しく思います。<医療生協地域理事さん>: とても嬉しい、そして貴重な授賞、おめでとうございます。奥様が居たらどんなにか喜ばれたことでしょう。専門用語も沢山出てきて、深くは理解できませんでしたが、班会で初めて伺った病理室で、私たちを温かく迎えて下さった先生やスタッフの方々を思い出しました。“ここは病気の犯人を見つける所です”と説明を受けて、顕微鏡で初めて見る癌細胞、ミョの世界。医療生協ならではの班会でした。“病理解剖は、医学の基礎である”をモットーに、先生は厳しい環境の中で病理科のある総合病院を市内に創設する必要があると訴えて頑張ってこられました。病理解剖に真正面から向き合っただけで感動しました。<元病理科職員>: 先生の長年のお仕事への情熱や努力の賜物とお祝い申し上げます。先生からお伺いした「ヒトT細胞白血病ウイルス1型関連脊髄症(HAM)」のお話しや「癌登録システム」のことなど、病理科でのことが思い出されました。朝礼で先生の博識や見識などの教示で色々なことを学ばせて頂き、他では得られない経験だと思っています。<元生協病院看護師、現福島大学病院保健婦>: 先生が情熱を持って取り組まれてきた事が、学会に於いても認められた事を、共に働いた者として誇らしく思います。これまで先生がどんな思いで医療に取り組まれたか、またその業績を改めて知り、感動しています。懐かしい人の名前や写真にも触れ、古仁屋時代や鹿児島生協病院時代を思い出しています。奄美大島の瀬戸内町古仁屋の加計呂麻島などを訪ねてみたいと思っています。その他: 森 茂郎(元東大病理学教授・日本病理学会会長)、森井英一(阪大病理学教授)、辻 求(元阪大2病理、大阪市大病理准教授)、米澤 傑(鹿児島大学医学部病理学名誉教授)、鹿児島義(元鹿児島市医師会長)、佐野恒雄(元南地区、徳之島診療所)、千葉周伸先生(元鹿児島医療生協理事長・病院長)などでした。

かつて、私が「NPO 風になつた体」でインドの Kolkata (旧 Calcutta) の「死を待つ人の家」(マザー・テラ創立)で医看学生と共にボランティアに参加し帰国後、病院での朝礼に際して、前日に亡くなられた方の冥福と担当された医師・看護師さんへの慰労と感謝のために、数秒間の黙祷を提案しました。しかし、院長から「朝からの黙祷は、眠くなる!」と拒否されました。(看護師さんは、継続されているようです。)また、私の定年に際して、長の名の付く方々から“ご苦労さま!”ではなく、“明日から出て来なくて良いです!”と云われました。その後、仕事探しにハワーク(公共職業安定所)に通い、「県民総合保健センター」の職場健診のお手伝いをしました。鹿児島市役所健診の際、「敬天愛人」などの展示を見かけましたが、県警本部の展示場には、西郷隆盛に関するものは一切有りませんでした。明治維新150年経ても、彼は皆与志町生まれの川路利良(としなが)大警視に抵抗した朝敵だからでしょうか? 鹿児島では、最近も江戸時代までの武家出身や公務員関係を優位に、また県外出身者に対して排他的で、高いポストや出身校にこだわり、上位下達(じょういかたつ)のようです。私がインターネットで鹿児島県の主な宗教団体の凡その比率を調べてみました。浄土真宗30%、浄土宗5%、日蓮宗5%、禅宗6%、キリスト教2%程度でした。従って、先祖のお墓への献花やお参りが多いようです。しかし、現実の相手への思いや“有難う!”の言葉かけが少ないようですが、如何でしょうか?

人への敬意や謝礼の意思表示は、日常の「祈りの習慣」と関連しているのではないかと思いました。更に、鹿児島の3大行事の1つ「妙円寺参り」では、「関ヶ原の戦い」での島津義弘の武勲を称え、慰霊する行事ですが、妙円寺には参らず「徳重神社」だけです。また、西郷隆盛や西南戦争の戦没者のお墓は、島津氏(初代から5代)の菩提寺であった浄光明寺(浄土宗の時宗: 一遍和尚・踊り念仏)の境内にありますが、現在は南洲神社であるかのように案内説明されます。このように、伝統行事においても実態とのギャップがあります。その原因が、明治維新の「廃仏棄釈」が全国で一番激しかった影響で、“祈り”をしたことと関係があるのではないかと推測しました。「鹿児島観光・文化検定」を勉強してきた理由は、この点にありました。「廃(排)仏棄(毀)釈(はいぶつきしゃく)とは、仏を廃(破壊)し、釈迦(釈尊)の教えを壊(毀)すという意味です。仏教寺院・仏像・経巻(経文の巻物)を破棄し、僧侶、出家者や寺院が受けていた特権を中止することでした。資料によれば、明治維新の尊王攘

夷の理論的支柱は、復古神道(平田派)や復古国学(水戸の藤田東湖)でした。彼らが廃仏論を唱え、1868年から1875(明治9年)まで、明治政府が「神仏判然令」を公布し、特に薩摩と水戸が激しく仏寺を破壊しました。薩摩藩の統治制度が門割制度だったので、庶民は厳しく監視され、土俗信仰や祭りも国家神道に取り込まれました。特に、浄土真宗は、門徒の生活と信仰を守る平和主義と団結力が、専制支配の藩主に都合が悪かったため、16世紀後半、安土桃山時代から300年間余り禁止され、「5人組制度」によって密告させたようです。厳しい取り締まりや弾圧を逃れて各地に「かくれ念仏洞」があります。困難な歴史を乗り越えて、現在、県内の仏教徒の7~8割を浄土真宗(西と東本願寺)が占めているようです。

県民性の形成は、歴史や文化、外国との関係など複雑なので、一概に宗教の影響だけでは図り知れないと思います。日常的に相手を大事にしなが、感情に任せず卑下しないで笑顔で語りかけることが大事だと思います。“はさみ法”：まず褒めて評価し、次に問題を明らかにして、最期に相手と一緒に工夫、解決の努力をすることは、実践的に有効だと思います。また、楽しい笑いを交えると、良い人生に繋がるのではないのでしょうか。

<参考資料>

- 「かごしま検定～鹿児島観光・文化検定～」、「薩摩藩の民衆と生活～隠れ念仏～」(松下志朗)：南方新社
- 「鹿児島藩の廃仏棄釈」(名越 護)、「権力に抗った薩摩人～薩摩藩政時代の真宗弾圧とかくれ念仏～」(芳 即正)：南方新社
- 「薩摩のかくれ念仏～その光と影～」(かくれ念仏研究会編)：法蔵館、「隠れ念仏と隠し念仏」(五木寛之)：講談社
- 「さつま今昔：かくれ念仏、廃仏棄釈」(桃園恵真)、「鹿児島歴史散歩」(原口 泉)：NHK鹿児島放送局編
- 「薩摩奇譚」(阿久根星斗)：八重岳書房、「知的唯仏論」(宮崎哲弥、呉智英著)：サガ
- 「鹿児島の近代社会運動史～宗教弾圧～」(松永明敏)、「鹿児島県の歴史～苦悩する藩政：かくれ念仏～」(原口 泉ら)：山川出版
- 「いい言葉はいい人生をつくる」(斎藤茂太)：成美文庫、「いいことがいっぱい起こるブッダの言葉」(植西 聡)：三笠書房
- 「笑いがいい人生をつくる」(コック、心屋仁之助、近藤春菜、犬山紙子)：PHP 研究所



石綿(アスベスト)肺に悪性中皮腫と肺癌合併症
病理学会発表 1979(昭和54)年



「敦煌の会」(故佐藤栄一名誉教授夫妻と) 於：いちにさん本店 '19.8.29



メケパント 坂元・園中、臨正三夫妻と年越し 19.12.31 於、杏仁香



玉竜山福昌寺(曹洞宗)：島津家代々の菩提寺
1549年、忍室和尚とザビエルが会談した。神仏混合の久光の墓
1869年(明治2年)廃仏毀釈で廃寺、昭和28年、県の史跡指定。